

委員会行政視察報告書

委員会名	観光建設常任委員会			
活 動 委 員 名				
石 橋 義 雄	山 端 博	今 泉 信 明		
中 嶋 秀 一	氣 田 量 子	江 渡 信 貴		
豊 川 泰 市				
経 費 区 分				合計金額
1 研修旅費	2 自動車借上料	3 議長交際費	一人当りの費用	
737,942	26,210	4,954	109,872	769,106
期 間 (年月日)	令和元年 7月24日 (水) ～ 令和元年 7月26日 (金) (2泊3日)			
視察事項	・北海道美瑛町 「観光政策における、DMOとの連携について」			
	・北海道苫小牧市 「苫小牧市の都市計画について」			
視察先	北海道美瑛町、北海道苫小牧市			
内容及び成果				
別紙報告書のとおり				

※視察報告書の充実を図るため、視察時の質疑応答事項等も記載してください。視察者個々の所感は別途作成し添付してください。

委員会行政視察報告書

委員会名	観光建設常任委員会			
活動委員名 石橋 義雄				
経費区分				
1 研修旅費	2 自動車借上料	3 議長交際費	一人当りの費用	合計金額
期 間 (年月日)	令和元年 7月24日 ~ 令和元年 7月26日 (2泊3日)			
視察事項	① 観光政策におけるDMOとの連携について ② まちほか再生総合プロジェクト(CAP)について			
視察先	北海道美瑛町 議会 " 苫小牧市議会			
内容及び成果				
<p>観光建設常任委員会では美瑛町の観光政策におけるDMOとの連携についてと苫小牧市の都市計画及びまちほか再生プロジェクトについて調査研修を実施しました。私達千和町と観光事業を進めるDMOを立ち上げ、備える観光事業に取り組んでいます。そこで美瑛町が展開している丘のまち美瑛DMO活動とはどのような様子を事業を展開しているのか？その活動を調査研修の事で当市の政策に参考におよぼすと考えました。美瑛DMOでは来々時より美々次世代へ美瑛を引き継ぐために農業、観光の重要性を地域住民の理解を醸成し、下から美瑛町の価値ある資産を商品化し地域全体の価値を高め、地域経済の発展と住民幸福度の向上、つまり農業と観光の共生、住民と観光客共生を計り観光地域作り、つまり自分からが儲けるのは、広く地域業者を儲けさせることをDMO活動の基本としている事を学びました。</p>				

※視察報告書の充実を図るため、視察時の質疑応答事項等も記載してください。視察者個々の所感も別途作成し添付してください。

二日目は若小牧市の都市計画について、まちなか再生総合
プロジェクト(CAP)について研修しました。今どきの自治体で抱
える人口減少、超高齢社会の到来による税収減、社会保障
費の増等抱える課題は同じであり事を学びました。
その中で将来見据えた持続可能なまちづくりの必要性から
効率的な行政運営、超高齢社会に対応可能なまち、
都市機能の集積、まちなかの魅力向上等に取り組んで
いるとの事でした。つまり新たな場所に新たなまちの
核を整備するよりも今あるまちなかの機能をしっかりと守り
拡充することで効率的で魅力ある都市再生と維持可能
なまちを作る事が出来るのではないかという事を考えさせ
られた研修でした。

十和田市議会観光建設常任委員会 行政視察報告書

山 端 博

視 察 日：令和元年7月25日（木）

視察場所：北海道美瑛町

人 口：約11,000人

面 積：676,78 km²

視察項目：DMO 事業について

美瑛町は、独特の波状丘陵の大地に畑が広がり、丘陵を縫って流れる河川流域が水田地帯となっているのが特徴で、国土や環境の維持・保全機能はもちろんのこと、美しい農村景観を目的に多くの観光客が訪れている。一方、農業者の高齢化は深刻であり、担い手・後継者不足や離農により農家と戸数が減少している。

DMO 活動の基本的な考え方は、情報を公平に伝えながら、トップアップ型の活動展開と自らが儲けるのではなく、地域事業者を儲けさせることを優先していく。

活動方針

- ・ Mission…持続可能な「日本で最も美しいまち」観光地マネジメント
- ・ Vision…「来た時よりも美しく」次世代に美瑛を引き継ぐために、美瑛町における農業および観光業の重要性について地域住民の誓いを醸成しながら、価値ある資産を点から線へ、面へと地域の価値を商品化して統一したブランド展開で地域全体のトータルの価値を高めて、観光客の満足度を最大化するとともに地域経済の発展と住民幸福度の向上を図る。
- ・ Goal image…地域 DNA(歴史、文化、生活、誇り等)を有料で体験させてあげる仕組みの構築をしながら、農業と観光の共生、住民と観光客の共生（住んでよし、訪れてよし観光地域づくり）の社会を目指す。

4つの戦略

- ①住民の観光に対する理解促進
(町民向けバスツアーの開催、事業者によるアンケート調査、リピート率65%)
- ②新たな観光商品の開発・提供
(四季折々の体験プログラム造成開発、商店街合わせたハンドメイドショップ滞在時間の増加)
- ③対象を定めた的確な情報発信

(ダイレクトメール、HP おいしい、楽しい、美しい、インスタグラム)

④受け入れ態勢の整備

(観光ガイド育成、キャッシュレス決済説明会、インバウンドセミナー中国、韓国、)

以上4つの戦略を基に観光経営を取組んでおり、斬新な発想と戦略、的を絞ったマーケティングとターゲティング、まちづくりに対する情熱と行動力などが必要であるとのことでした。十和田市も豊富な農業資源や観光資源、DMOを有しており美瑛町との共通点も多いことから、本市にとってのまちづくりや観光振興を比較参考にし、研究していきたい。

※日本版DMO法人とは、地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を実施するための調整機能を備えた法人となります。

十和田市議会観光建設常任委員会 行政視察報告書

山 端 博

視察日：令和元年7月26日（金）

視察場所：北海道苫小牧市

人 口：約17万人

面 積：561,57 km²

視察項目：まちなか再生総合プロジェクト事業について

苫小牧市は北海道南部の太平洋に面しており、道内5番目の人口規模を誇ります。特定重要港湾である海の玄関「苫小牧港」を有し、「新千歳空港」にも隣接、鉄道・国道・高速自動車路など交通アクセスに恵まれた活気にあふれる都市であるとともに、勇払原野や樽前山のふもとに広がる広大な森林や湖沼など、緑に恵まれた自然豊かな環境にあります。

苫小牧市ではこれまで「JR 苫小牧駅」を中心とする中心市街地の活性化について様々な取り組みを行ってきましたが、人口増加に伴う市街地の拡大整備や商業施設等の郊外立地、情報化社会の進展による消費者動向の変化等により衰退に歯止めがかからず、抜本的な解決策が見いだせない状況が続いていました。

そこで、平成21年度にプロジェクトチームを立ち上げ、意見交換会やワークショップ等の市民参加の機会を通じて提出された様々な意見・提案を踏まえ、平成23年6月に「まちなか再生総合プロジェクト（CAP）PROGRAM PART I」を策定、まちづくりを進めています。このプロジェクト事業では3つの大きな柱を軸に各種事業を行っています。

①にぎわいの創出に向けた取り組み

食資源を活用したブランド戦略、商店街との連携による商業の活性化、まちなか情報発信施設の開設やイベントの開催等、人が集い、にぎわいを取り戻すための事業を実施しています。

・取り組み

東胆振地域ブランド戦略事業 ・まちなか交流センターの開設 ・マルシェ（地場産品販売）事業 ・「まちなか交流館」連携事業 ・空き店舗活用事業 ・苫小牧駅前周辺再整備事業 ・苫小牧市公式キャラクター「とまチョップ」PR 事業 ・まちなかグルメ

推進事業 ・ まちなかイベントの開催 ・ 共通駐車券システム構築事業 ・ まちゼミの開催 ・ C A P 啓発事業

②公共交通の利便性の向上に向けた取り組み

まちなかを循環する「循環バス」、まちなかと郊外を結ぶ「快速バス」を運行し、まちなか主要施設への移動手段を確保しています。

③まちなか居住の推進に向けた取り組み

建て替える市営住宅をまちの中心部に移転する市営住宅まちなか建設事業、まちなかに賃貸住宅を建設する事業者に対し、一戸あたり 100 万円を助成するまちなか居住支援事業を行い、高齢者をはじめとした多くの人が暮らしやすい住環境を整備、まちなかへの定住促進を推進しています。

本プロジェクトによって、交通弱者の移動の確保、市中心部の居住環境整備（公営、民間賃貸物件の増）、各種イベントの開催や住民が散策・利用できる施設の整備が図られました。数字上、目を見張るものはないということですが、まちなかに活気が戻ってきて若い世帯の移住が増えているそうです。働く世代に居住してもらい、高齢者には住みやすい場所を提供するなど、これからの人口減少・超高齢化社会に対応可能なまちづくり事業の手本として、当市でも大いに参考とすべきであると感じます。

観光建設常任委員会行政視察報告書

今泉信明

活動委員名 委員長 石橋義雄 副委員長 山端博

委員 豊川泰市 江渡信貴 氣田量子 中島秀一 今泉信明

経費区分 1 研修旅費(円)

2 自動車借上料(円)

3 議長交際費(円)

一人当たりの費用(円)

合計金額(円)

期 間(年月日) 令和元年7月24日～令和元年7月26日

視察事項 (1)北海道美瑛町 ・観光政策における DMOとの連携について

(2)北海道苫小牧市・まちなか再生プロジェクト (CAP) について

視察先 北海道美瑛町及び苫小牧市

内容及び成果 美瑛町について

当市は今年度からDMOによる観光地域構築のため、観光資源である十和田湖を中心とした観光のあり方を求めて、先進地を視察しました。

美瑛町は、明治26年殖民区画が設定され、美瑛原野と称しているところに翌27年兵庫県人の移住開墾がなされたのが、美瑛の始まりです。終戦後開拓行政が始まり、急速に人口増加を見るに至った。その後、自然を生かした観光地開発が行われ、農業と観光の町として発展してきました。そこで、平成28年7月15日おかのまちびえい活性化協会を地域DMOとして登録し活動を始めました。

- ・DMOの事業と活性化の事業の両方をスタートさせていますが、スタートしたばかりで、方向性を打ち出すまでには、至っていない。
- ・CRMデータ(顧客管理)による経済効果予想して取り組んでいる。
- ・観光客からのアンケート調査に取り組み今後の活動に生かしたい。
- ・カード決済の普及が課題であり、また外国人留学生をガイドに養成したいとかがえている。

委員の質問に対して

質問 交通の便はどうなっているのですか？

JR北海道の駅がありますが、駅と観光地である美瑛の丘まで、距離があるので、旭川から、レンタカーで来る観光客が多いです。

質問 外国人観光客で何か困った点は、ありますか？

マナーの悪い観光客に、日本のマナーを教える事が難しい。

質問 DMOを立ち上げての効果は？

DMOの効果は未知数。

質問 DMOに職員の派遣はあるのか？

二名の職員を派遣している。

当市の場合に当てはめて考えると、空港、駅ともに距離があるために、レンタカーの観光客が増加する要素が大きいが、焼山地区から奥入瀬溪流沿いの、道路整備が進まないと、観光客が車を運転した場合、どういう感想を持ち、それがどのように、情報として発信されるのか見極めないと、観光客の増加につながらないのではないか。

苫小牧市について

当市はまちなか商店街の空洞化が進展しており、その対策等を考察するために先進地を視察しました。

苫小牧市の都市計画について、まちなか再生総合プロジェクト(CAP)について、苫小牧市では現在まちなか再生総合プロジェクト・プログラムパート3という事業計画を進めて、苫小牧駅周辺の再生に努めている。事業計画を立案するに至った経緯は、郊外の宅地開発により中心地から周辺地域に人口が拡散し郊外型大型店が出店したため商業環境が変化し、また車への依存が大きくなり、郊外店に出

かけて、買い物をするライフスタイルの定着又、インターネットビジネスの発展そして何よりも、商業者の高齢化(特に中心部商店街)に伴い後継者不足などがあります。そこで、まちなか再生プロジェクト(CAP)を進めている最中です。その具体的なものは、

- ・市営住宅を中心部に移転
- ・駅の近くに足湯を設置、年間8,000人が訪れている
- ・地元のホッキ貝を使って、ホッキライスバーガーを開発して飲食店で提供している
- ・苫小牧駅周辺の民間の建物の1階を市で賃借して、指定管理者が運営し平成30年度は356,462人の来館者数があった

委員の質問に対して

質問 CAPの計画はどこから持ち上がったのか？

発案は役所内の若手が中心になり、それが計画になり皆で問題点を共有して取り組んでいる。

質問 空き店舗を利用した事業をやめた人はいないのか？

まだ、その事例はありません。

質問 まちなかを活性化するために取り組んでいる事は？

まちなかに来る目的を創設して、賑わいを作り出している。

将来、このまちに住む期間が長くなる若い人たちが街の将来に責任を持ち、また高校生なども行事に頻繁に参加している新聞記事も読ませてもらい、衰退し始めたら若い人たちの考えを取り入れて危機を乗り越える手法を見せられて、市長さんの気持ちの大きさを感じました。市長さんのお話が聞けたら又、違う視察になったのかなと感じました。以上

観光建設常任委員会

【美瑛町の観光政策における DMO との連携】

【苫小牧市の都市計画について】の視察報告書

中嶋 秀一

日時 令和元年 7月 24 日 ～7月 26 日

1、美瑛町の観光政策における DMO との連携について

★美瑛町の概要

美瑛町は北海道のほぼ中央にあり、十勝岳連峰と夕張山系との間に位置し、旭川市、芦別市、上富良野町など 2 市 6 町に隣接している。

気象は、寒暖の差が激しい内陸性の気候で、春夏秋冬が明確なため、四季の移り変わりによる美しい自然を楽しむことができる。

人口 平成 31 年 3 月末現在 9,965 人

産業 農業と観光が主

農業生産高 130 億円～150 億円

観光客 年間約 220 万人

★DMO 活動について

ビジョンとして、「観光客の満足度を最大化するとともに、地域経済の発展と住民幸福度の向上を図る」

平成 28 年 7 月 15 日に一般社団法人 丘のまちびえい活性化協会を日本版 DMO 候補法人として登録。様々な事業やイベントを開催。

(美瑛バス事業開始、CRM 事業開始、農泊推進事業「レストランバス運行」「住んでよし、訪れてよし」観光地域づくり講演会、観光ガイド育成講座開催、カルチャー・トーク・カフェ開催、「美瑛手づくりフェア」開催等々)

★丘のまちびえい DMO 4 つ戦略の進捗報告

- ①住民観光への理解促進
- ②新たな観光商品開発・提供
- ③情報発信
- ④受け入れ態勢の整備

町民向けバスツアーの開催等、新たな商品開発や、CRM データによる分析で「観光客の月別入込客数」、「年間宿泊延数」、「月別宿泊延数」、「国別観光客数」、「リピーター率」を「美瑛時間キャンペーン」の報告会で紹介するなど、住民の方々に進捗報告。

また様々な課題を克服してきた。例えば、農地に観光客が入るので看板を設置。キャッシュレスの普及、情報発信に観光協会ホームページの特設サイトを設けるなど、国内外に向け情報発信。

★丘のまちびえい DMO の 2019 年度取り組み

- ①住民の観光への理解促進

Be my BIEI プレゼントキャンペーンで町内200か所に申込用QRコードを設置。

②美瑛観光ルールマナー110番プロジェクト

観光マナーやルール違反の写真や映像の収集を目的とした情報提供窓口の開設

③美瑛観光のガイドブック作成

美瑛版 チビスロウ 作成

④体験プログラム PR 動画作成(夏/秋バージョン)

冬バージョンに続き、1泊2日モデルツアー夏/秋バージョン



2、苫小牧市の都市計画について

★苫小牧市の概要

苫小牧市は、札幌市・旭川市・函館市に次ぐ道内 4 番目の人口規模となっている。苫小牧市は第二次産業の割合が高く、工業の町で 1910 年（明治 43 年）に王子製紙苫小牧工場が操業開始して以来、製紙業などの素材型産業を主力に発展してきた。札幌都市圏に最も近い太平洋岸の港であり、新千歳空港にも近接している利便性から北海道工業地域を代表する工業都市・港湾都市になり内航取扱貨物量は日本一の取扱量となっている。苫小牧東部地域（苫東）には世界最大級の地上タンク方式による石油備蓄施設がある。

苫小牧市は 1966 年（昭和 41 年）に「スポーツ都市宣言」を行い、スポーツを通したまちづくりを積極的に行っている。

また、苫小牧市はホッキ貝（ウバガイ）の漁獲量日本一を誇り、2002 年（平成 14 年）には「市の貝」として制定された。苫小牧市の水道水は厚生省（現・厚生労働省）の「おいしい水研究会」が選んだ「全国の水道水がおいしい都市ベスト 32」に入選している。

経済産業省の事業として、国内初となる CCS 大規模実証試験が 2012 年度より苫小牧西港区を拠点に行われている。

人口 平成 30 年 3 月末現在 171,699 人

産業 第二次産業と漁業

★CAP3 まちなか再生総合プロジェクト

●苦小牧市総合計画（第 6 次基本計画改定版）のまちづくりの目標「安全・安心で快適に暮すまち」を実現するための個別計画の 1 つ

●人口減少と超高齢社会に対応できる「持続可能なまちづくり」を目指す苦小牧市独自の計画

●平成 23 年「CAP1」、平成 26 年「CAP2」、平成 29 年 3 月末「CAP3」策定

まちなか再生総合プロジェクトは、

苦小牧市人口ビジョン・総合戦略、苦小牧市都市計画マスタープラン、苦小牧市地域公共交通総合連携計画、苦小牧市バリアフリー基本構想、苦小牧市住生活基本計画などとなり、苦小牧市総合計画として平成 30 年度～平成 35 年度となっています。

また、CAP3 は

- (1) にぎわいの創出にかかわる事業として、様々な事業を展開します。
- (2) 公共交通の利便性の向上にかかわる事業では、バスの運行や利用者満足度調査による課題等を検討。

(3) まちなか居住の推進にかかわる事業では、ココマト管理事業や空き店舗・テナント活用事業、まちなか産学連携推進事業、子供・若者まちづくり参加推進事業等々、新規 7 含む 18 事業で街中の活性化に向けた事業計画を実行します。

イベント開催については、市民会議を立ち上げアンケート調査。

若者の力を巻き込み[「フェス飯グランプリ」「ハロウィーンイベント」「駅前イルミネーション」等を開催します。

苫小牧市全体としては、人口減の流れになっているようだが、若い市民が増加傾向にある。また、駅周辺に商業施設や高齢者の生活利便性を図る施設等を集中させ様々な都市型のコンパクトシティを目指す青写真ができていることに、未来の十和田市のあるべき姿を見た思いがしました。

観光建設常任委員会行政視察報告書

氣田 量子

日時 平成31年7月24日～26日

視察先 北海道・美瑛町、苫小牧市

・丘のまちびえい DMO 活動状況について

Mission-持続可能な「日本で最も美しい村」観光地マネジメント

Vision-「来た時より美しく」次世代に美瑛を引き継ぐために、美瑛町における農業および観光業の重要性について地域住民の理解を醸成しながら、美瑛町の価値ある資産を点から線へ、線を面へと地域の価値を商品化し、統一したブランド展開で地域全体のトータルの価値を高め観光客の満足度を最大化するとともに、地域経済の発展と住民幸福度の向上を図る。

Goal Image-地域DNA（歴史、文化、生活、誇り）を有料で体験させてあげる仕組みの構築をしながら、農業と観光の共生、住民と観光客の共生（住んでよし、訪れてよし観光地域作り）の社会を目指す

DMO活動の基本的な考え方

- ・情報は公平に伝えながらも、底辺のボトムアップではなく良い物

を更に引き上げる活動を展開する

- ・自らが儲けるよりも、地域事業者を儲けさせることを優先

実際に旭川駅から美瑛町への電車の車内は私たち以外、ほとんどが外国人でした。駅を降りると、街並みが整備されて木や花がきれいに植栽されて素敵でした。しかし、電車の中でカップルが日焼け止めスプレーを体中にかけて始めて臭くて大変迷惑でした。密室であのようなことをするのはマナーが悪いことだと外国人に前もって周知が必要であると身をもって感じました。

役場は大変立派で、町の役場ではなく市レベルの豪華なつくりに驚きました。町全体が見渡せる高さの展望台も隣接しており観光に力を入れている町役場でした。

美瑛町の観光の目玉、色彩の丘に行ってみました。観光客でごった返していました。大型観光バスが30台以上止まっていて、広大な駐車場も満車状態で凄い人でした。

市の運営ではなく、民間での運営とのこと。広大で色とりどりの花が植えられていて、たくさんの人々がカメラ片手に楽しんでいました。

十和田市のDMOは生まれたばかりですが、観光商品開発・販売促進

などこれからまだまだ伸びしろがあると思うので、美瑛町の体験プログラム等大いに活用して、また、冬の観光ももっと宣伝して稼げる観光に役立てていきたいです。

・苫小牧市まちなか再生総合プロジェクト・プログラムパート3

東西に約40kmと長い町、郊外型大型ショッピングセンターが進出してきたため、中心市街地の店舗が衰退していき、駅前商業ビルが閉鎖に追い込まれていきました。

まちなかがもともと持っている機能は、医療、公共交通、娯楽、商業、福祉などの機能をもっています。持続可能なまちづくりをつくるには、市で1つしか持てない機能や施設はどこにあるのが良いのか？と考えました。

まちなか再生プロジェクトを立ち上げ、将来を見据えた「持続可能なまちづくり」の必要性を意義付けて、

まちなか再生のメリット

多様な都市機能が集積

すでに十分な都市基盤あり

交通の結節点

公共交通の利便性高い

東からも西からも等距離

などから、新たな場所に新たなまちの核を整備するよりも、今あるまちなかの機能をしっかりと守り、拡充させることが効果的だと結論を出した。

そして、16以上の事業を展開する。

なかでも、大学生に「良い提案があれば市の事業にどんどん採用したい」と若者や子育て世代に街づくりに参加してもらっています。

全国から町キャラを集めたイベントを開催するなど、少しずつ活気が出てきています。

まだ、道半ばですが、若い世代が多い町なので大いに期待が持てる企画だと感じました。

十和田市も大学生に提案してもらおうなど、若い世代の意見や企画など取り入れて商店街に活気を取り戻すプロジェクト、作りたいですね。

頑張りましょう！！

観光建設常任委員会行政視察

美瑛町 「観光政策における、DMOとの連携について」

江渡信貴

美瑛町は北海道のほぼ中央「旭川市」と「富良野市」の中間に位置し、大雪山国立公園十勝岳連峰のすそのから、なだらかに丘が広がる美しい自然景観が美瑛町の魅力を創り出しています。面積は、673.78km²と東京23区の広さに匹敵し、その70%以上を山林が占めています。

DMOに至るまでの背景として、平成元年、国のリゾート法に元づく「富良野大雪リゾート地域整備構想」の指定を受けたことで周辺地域の発展が予想され、また美瑛の丘への観光客や町外からの移住希望者が増えたことにより景観保全の気運が高まり平成元年12月15日に美瑛町景観条例を制定しました。

バブル崩壊後、自然保護・景観保全へと意識方向が変わったことも後押しし、ますます「美瑛の美しい農村景観」の価値が高まりました。

平成16年に国が景観法を制定しました。このため、美瑛町の景観条例は景観法に基づかない条例となり、平成18年に景観行政団体の指定をうけるものの、丘のまち美瑛の景観を将来にわたって守り、育てていくためには景観形成の基準をどのように設けるべきか検討を重ねることとなりました。

平成24年北海道大学観光学高等研究センターと連携協定を結び議論を重ね平成27年3月に「美瑛町景観計画」策定されました。それとあわせ条例の基本理念を踏襲するとともに景観法の委任状令となるよう「美瑛の美しい景観を守り育てる条例」を全部改正したそうです。

①景観計画として

- ・美瑛町全域を景観計画区域としている（前は町有地のみだった）
- ・各区域の特性に応じた景観形成を図る。
- ・届出または通知の対象となる行為と手続き。

- ・景観形成の方針と景観形成の基準を決めた。
- ・優良景観ポイントと優良景観ルートの作成。
- ・美瑛町内に存在している建物が周辺環境に調和している場所等の事例集を作成する。

②条例の目的

美瑛町の美しい景観の保全と形成及び景観法の施行に関し必要な事項を定めると共に総合的な施策に関して必要な事項を定め、町民等、町及び事業者が協働し、潤いと安らぎを実感できる快適で魅力あふれる美瑛町の創造に資することを目的とする。

平成 28 年 7 月 15 日に日本版DMO候補法人に登録する。平成 24 年、北海道大学観光学高等研究センターと連携協定を結んだ関係もあり平成 28 年 12 月 DMOの基本的な考えや概念を学ぶ。平成 29 年 3 月まで 5 回のセミナーや勉強会を各方面の方々と実施。平成 30 年 12 月 21 日に正式登録される。

DMOの戦略として 4 項目を挙げ、それぞれに対し細かな活動をしています。美瑛町の内容は添付資料にあるので、十和田市との違いを挙げてみます。

①住民の観光に対する理解促進。

・理解促進に対して、十和田市DMOはまだまだ進んではいない。座談会等活動はしているが関係者が主流で市民まで巻き込んでいない。これでは市外からきた方々に市民としてどう接したらいいのか、観光客の方々にどう十和田市が魅力あるまちに想って貰えるのか。美瑛町のような対策が必要であると考えさせられました。

②新たな観光商品の開発・提供。

・十和田市も様々な観光資源を拾い上げ、そこにスポットをあてたり、磨き輝かせているが、まだまだ不十分である。例えば、ふるさと納税とコラボ等、もう一工夫は必要だと考えます。一つの事例に対しての深堀も必要ではないかと思えます。

③対象を定めた的確な情報発信。

・十和田市はホームページや各種SNSを駆使している他、海外の旅行会社等に情報提供。インフルエンサーにリアルタイムで動画投稿や撮影した写真をSN

Sに投稿させたりしています。今後さらに改善していく流れにあり、今後も情報交換していきたい。

④受け入れ態勢の整備。

時間、能力、意識が必要な部分であります。ガイド育成や留学生インターンの受け入れなどは必要だが、もう少し全体の底上げをしていかなければならないと思いました。関係部署に思いを伝えたいと思います。

苫小牧市 「まちなか再生総合プロジェクト(CAP) について」

江渡信貴

豊富な水と木材資源に恵まれていた苫小牧には製糸業が進出。その後、苫小牧に工業港の必要性が認められて1963年(昭和38年)に世界初の内陸掘込港湾となる苫小牧港が開港。札幌都市圏に最も近い太平洋岸の港であり、新千歳空港にも近接している利便性から新千歳空港北海道工業地域を代表する工業都市・湾岸都市になりました。苫小牧港の内航取扱貨物量は日本一の取扱量となっています。苫小牧東部地域には世界最大級の地上タンク方式による石油備蓄施設があります。

苫小牧市では将来の人口減少・超高齢化社会に向けた「持続可能なまちづくり」の実現に向けて平成23年6月からまちなか再生総合プロジェクト(以下CAPと記載)を策定して、様々な施策に取り組んできました。29年度からCAPプログラムパート3が始まり、地域住民の方々、将来のまちづくりの担い手である子供たちとともに、まちへの愛着と誇り、未来への責任感を育む環境を創っていく。また、既存の拠点施設や商店街との連携、ネットワークによる人の流れを生み出すことで賑わいの創出を目指しています。

苫小牧のCAPとは

- ・苫小牧市総合計画の中の個別計画の1つである。
- ・苫小牧市(東西に39.9kmの海沿いに面した細長い地形)なので、人口減少と超高齢社会に対応できる「持続可能なまちづくり」を目指す独自の計画である。
- ・平成23年「CAP1」、平成26年「CAP2」、平成29年「CAP3」策定している。

まちなか(中心市街地)がもともともっている機能は医療、公共施設、公共交通、娯楽、商業、福祉等である。これらを効果的・効率的に運用していかなければならない(東西に長い地形なので)。また、郊外の開発や郊外大型店の増加等まちなかの魅力低下などの進行を食い止めるため、将来を見据え都市機能の拡散傾向に歯止めをかけ、多くの人が暮らしやすい、歩いて暮らせるコンパクトなまちが必要と苦小牧市では考えた。

まちなか再生のメリットとして

- ・多様な都市機能が集積している。
- ・既存の都市基盤が揃っている。
- ・交通の結節点である。
- ・公共交通の利便性が高い。
- ・東からも西からも等距離である。

このことから、新たな場所に新たなまちの核を整備するよりも、今あるまちなかの機能をしっかりと守り、拡充させることが効率的であると思います。そのためには、まちなか再生＝中心市街地における人口減少・超高齢社会に対応可能なまちづくりの実現が必要であります。

苦小牧駅(苦小牧市の中間にある)を玄関口とした、再生の基本方針と事業展開をしています。にぎわいの創出として16事業。公共交通の利便性として2事業。まちなか移住の推進で2事業おこなっています。これまでのCAPの取組を通じて市民・団体・企業等、民間主体によるまちづくりの機運も高まり、まちづくりに関わる人材も増えてきたそうです。

十和田市ではB-1グランプリの開催等、市民を巻き込んだ大きな経験があります。そのノウハウは貴重な財産であります。同じイベントではなく、違う取組、違う観点からその財産を継続していく方法を模索していかなければなりません。十和田市中心市街地活性化基本計画、十和田市総合計画に寄り添った施策・政策を一刻でも早く考えていかなければなりません。

観光建設常任委員会行政視察報告書

豊川泰市

-
1. 日 時 令和元年7月25日（木）
 2. 場 所 北海道美瑛町
 3. 視察項目 「観光政策における、DMOとの連携について」

4. 内容及び成果

美瑛町では、平成28年7月15日に一般社団法人 丘のまちびえい活性化協会を日本版DMO候補法人として登録。DMOでは主たる観光資源である農業景観を今後も美しく維持していくために、農業者と観光事業者が連携し最適なバランスを見つけていくことや、訪れる観光客の数が急激に増えている現実に対して、試験的に運行している周遊バスなどを通して不足している二次交通の解消を目指していくこと。夏に集中している旅行者の偏りを是正するため、春・秋・冬も楽しめる通年型の観光地を目指しているほか、通過型の傾向を脱却するため、滞在プログラムの充実を図ることなどに取組んでいた。

そのほかアンケートキャンペーンの分析結果報告会を開催し、町内の観光事業者へ情報提供もおこなっているとのことだった。

-
1. 日 時 令和元年7月26日（金）
 2. 場 所 北海道苫小牧市
 3. 視察項目 「都市計画（まちなか再生総合プロジェクト）について」

4. 内容及び成果

苫小牧市は道内の主要都市の中では若い市民が多いが、人口は年々減少している状況である。商業環境は大型店等が撤退し中心市街地が衰退しており、郊外へ大規模集客施設が進出し買い物、娯楽等の生活の中心が郊外へ移動している。人口減少、高齢化社会、都市機能の拡散等の問題がある中で、将来を見据えた持続可能なまちづくりの実現が必要となってきた。その中で苫小牧市独自の計画としてCAP（まちなか再生総合プロジェクト）を策定し、中心市街地がもともと持っている機能を活かし、だれもが安心して暮らせる人にやさしいまちを目標として、公共交通の利便性の向上、まちなか居住の推進のほか、地域の特徴を生かしたにぎわいの創出などさまざまな事業をおこない、まちづくりを進めていた。